

## 東京女子大学一連の建築群

(本館・図書館・校舎・  
チャペル・講堂等前庭  
を囲んだ)

所在地 東京都杉並区善福寺  
用途 図書館・講堂・チャペル  
竣工年度 1938年  
所有者 学校法人東京女子大学  
設計者 アントニン・レーモンド  
施工者 清水建設(株)  
維持管理者 学校法人東京女子大学  
管財課



【審査評】 キリスト教の教えに基づく奉仕と犠牲を建学の精神とし、大正7年に女性に最高の教養を与えることを目標にして発足した東京女子大学のキャンパスは、赤松の林を主体にした武蔵野の豊かな自然の中にある。大正10年に計画が始まり、本館・図書館は昭和5年に、チャペル・講堂は昭和13年に竣工している。白亜の壁に緑色の建具と黒灰色の瓦屋根の本館・図書館及び校舎は、正門を入った広い芝生の前庭をコの字形に囲んで配置され、この一連の建物の外観は竣工当時の清楚なたたずまいのまま現在に引き継がれてきている。本館の図書館は規模の拡張と共に空調設備の増設や照明設備の改善などを行っているが、この改修も当初から在る部分と調和した形で違和感なく行われている。

これに対して、チャペル・講堂は正門の直ぐ右手に前庭をやや囲い込む状況で建てられている。この建物は、当初は当時としては珍しいコンクリート打放しで仕上げられ、チャペルの外壁は多彩なステンドグラスを嵌め込んだコンクリートブロック積みで、これも当時としては異色の工法であった。第二次世界大戦中は防爆のために迷彩を施したが、戦後それがうまくとれないので、白く塗装され今日に至っている。チャペルの内部は竣工当時のままだが、そのストイックでありながら温かさを湛えた内部空間は、今でも訪れる人に感動を与えてくれる。当初、パイプオルガンの設置が計画されていたが、諸般の事情から未設置のまま時が経過し、平成2年になってやっと設置されることになった。50年かけて完成したともいえるし、音響効果を検証することができたともいえる。また、キャンパス全体が女性のための大学に相応しく、隅々にまで行き届いた維持管理がされていて、使いこまれた清楚さの魅力を創り出している。

この前庭を中心とした建築群は、大学の象徴的な空間として、卒業生も含めた全学の心の故郷であり、精神的な支柱ともなっている。将来、キャンパス全体の再開発をする必要がでた場合にも、この前庭を中心とした建築群は、将来にわたって保存した状況で進める方針だそうである。